

咸錫憲の『意志から見た韓国の歴史』 —「苦難」の意味を中心に—

古田 富建

1. 歴史エッセイ『意志から見た韓国の歴史 (뜻으로 본 한국역사)』と咸錫憲

1-1. 咸錫憲の生涯

60年代序盤に「韓国的なるもの」の模索が社会的に広がりを見せる中、その後の韓国社会に長く影響を及ぼすことになる1冊のエッセイが出版された。『意志から見た韓国の歴史』(1962)である。

著者の咸錫憲(1901-98)は元歴史教師の思想家・文筆家で、本著は「解放は盗人のようにやってきた」という名言で知られる。植民地時代に「独立を勝ち取った、奮闘した」という当時の一般認識に疑問を呈し、独立のために自分たちが直接手を下せたことは何もないという自国の歴史に対して鋭い省察と自戒の意味を込めたものだった。

この書籍は一見歴史書のように見えるが、書店で思想哲学コーナーに分類されていることから、歴史エッセイあるいは哲学書と見るべきである。いわゆる歴史研究書ではないので、歴史学者が本著を取り上げることはなく、主にキリスト教神学者や哲学者の研究対象となっている⁽¹⁾。冒頭で「宗教史観」について熱く語るところからも、哲学的思索であることを物語っている。

1901年に朝鮮半島北部の平安道に生まれた咸錫憲は、民族教育が盛んなキリスト教系の中等教育機関・五山学校を経て、1924年に日本の東京師範学校に留学し、帰国後、27歳で母校・五山学校の歴史教師に着任した。日本留学時代に内村鑑三から影響された咸錫憲は、同じ無教会主義者の金教臣が主筆を務める『聖書朝鮮』⁽²⁾に寄稿していたのが「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」(1934年2月号から1935年12月号まで、全22回)である。

咸錫憲は『聖書朝鮮』の連載時に、朝鮮の歴史について以下のように語っている。

私は6,7年以来、中学生に歴史を教えており、どうすれば若者の胸の中に光栄ある歴史を把握させることができるか努力をしてきた。しかしそれは無用であった。幼い時聞いた乙支文徳、姜邯賛の名前を大きく叫んでみようとしたが、それで終わってしまうので朝鮮の歴史全体が発する呻吟の声はとてつもなく大きい。⁽³⁾

植民地時代に日本のエリート教育を受けた咸錫憲が、自らの歴史に自負心を持ってないでいる様子がうかがえる。

創氏改名や日本語授業の強要を拒否する形で、咸錫憲は37歳の時に五山学校を退職する。以降、当局の監視を受け、二度の投獄を経つつ隠遁生活を送った。そんな中、老荘思想や仏教教典など、様々な宗教の教典に触れていったという。解放後の1950年3月に、上記の連載が初めて『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』の名で単行本化された。30代の頃の連載は、

植民地当局の検閲によって日本を批判した部分、「苦難の意味」「歴史が示す我らの使命」という最も重要な部分が削除されていたため、そこを補ったものだった。

咸錫憲はキリスト教無教会派からクエーカー教徒を経て、52歳の時に「大宣言」という詩を発表した。キリスト教を含むすべての宗教宗派に属さないという立場を宣言するものであった。咸錫憲は月刊誌『思想界』で言論活動を行い、政府やキリスト教会に対する批判を展開した。『思想界』はその後の独裁政権下に言論面で抵抗したことで知られ、『思想界』を舞台に、咸錫憲自身も注目されるようになっていった。

『意志から見た韓国の歴史』が出版されたのは62年、咸錫憲が61歳の時である。書籍名が変更されており、大幅な加筆によって50年版の分量の2倍近くになっている。その後も歴史的な事件が起きるたびに何度か改訂されているが、大枠は62年のものである。初版の発行部数は定かでないが、62年に一字社、63年に崇義社、65年に三中堂、第一出版社が競うように出版していることから見ても、社会的注目度の高さが伺える。現在は韓国史、韓国文化の古典的作品に位置付けられており、大学生の必読書ともされている。

1-2. 「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」

本著の内容はもともと、30代の頃の咸錫憲が、『聖書朝鮮』に寄稿した歴史エッセイ「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」の連載がベースになっている。『聖書朝鮮』とはキリスト教無教会派が発行していた雑誌である。

咸錫憲が、聖書的視点から朝鮮通史を概観した「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」の連載をスタートしたのは34年からであるが、その直前に、日本で次のような論文が発表されている。連載論文「聖書よりみたる日本」(1929)である。この論文を執筆したのは、無教会主義の提唱者である内村鑑三の弟子である藤井武(1888-1930)であった。

創造主としての神、一神教文化のない東アジアで、キリスト教的な歴史観を自国の歴史と重ね合わせたおそらく初めての論文で、藤井は古事記など日本の神話にキリスト教を当てはめ、「ナザレのイエス教」を真に述べ伝えることができる国は東洋の国・日本であるとし、「新しいキリスト教」を日本から興すべきだと語っていた。

咸錫憲や藤井武は、内村鑑三の聖書に基づいた終末論的歴史観に立つて自国の歴史を考察しようとした⁴⁾と、朴賢淑も指摘しているように、キリスト教の文脈を自国史に当てはめる考察が、当時内村鑑三の周囲で起きていたことがわかる。

2. 苦難の朝鮮史と神による受難：「歪んだ『民族的特性』と『民族改造論』」

2-1. 韓国史における苦難の意味：神による受難の意味付け

本著は、「人間の歴史には神の介在がある」という史観を説明するところから始まる。この「宗教史観」に基づき、朝鮮民族の古代神話時代から現代史までの歴史の再解釈を行うのが本著の目的である。例えば、62年度版では檀君朝鮮から朝鮮戦争までを取り上げている。朝鮮戦争は「ハナニムの試験問題」であったとし、「おそらく最後の問題」で、「今度及第すれば生きられるし、今度もまた落第すればおそらく永遠に滅んでしまう」とし、神が歴史の中で最終試験を課す様相を綴る。

咸錫憲の歴史解釈では、ハナニムから見た視点が貫かれる。ハナニムとは韓国キリスト教

で神を指す固有語である。

歴史について咸錫憲は、「人がハナニムを求める記録であり、ハナニムがその子を求める記録」⁽⁵⁾と定義する。創造主でもあり統治者でもあるハナニムは、歴史の統治者で、人生の出来事ひいては人間の歴史は神の深い配慮や意思によって起こっているという「神の摂理観」⁽⁶⁾から歴史を見つめ直そうとした。

キリスト教神学において、神は唯一絶対、全知全能、完全無欠な超越的存在である反面、人間の祈りを聞き入れ、人間を救い、歴史の中で働く内在的存在でもある。咸錫憲は、超越的存在であることよりも内在的存在として神を捉えていたようである。また、神の介在は人間の側面から見れば恩寵あるいは厳愛として現れるが、「われわれにあるものといえば貧しさと苦難だけだと思えばクラクラとしてきた」⁽⁷⁾と嘆き、韓国史は古代から現在に至るまで厳しい「苦難」ばかりであったという⁽⁸⁾。

韓国史の基調についても、歴史の再解釈の前に明言してしまう。「地理」「民族の特性」「神の意志」⁽⁹⁾という歴史の三大要素を見たときに、韓国史の基調は「苦難」だというのである⁽¹⁰⁾。その上で、歴史の中から様々な「苦難」をピックアップしていくのである。

では神はなぜ、どのような苦難を朝鮮民族に与えたのだろうか。咸錫憲が最初に本著を執筆したのが30年代の植民地期であることを前提に考察してみる。

苦難の歴史！ 韓国史の底に秘められて流れる基調は苦難だ。この地も、人も、大きな事も、小さな事も、政治・宗教・芸術・思想も何もかもがことごとく苦難をしめすものだ。これを聞いて驚く人はいないだろう。だが恥ずかしく、心痛む事実であることはどうしようもない。⁽¹¹⁾

本著のキーワードは、神が韓国史の中で絶えず与えた「苦難」である。邦題はそのまま『苦難の韓国民衆史』であるし、咸錫憲の歴史観を「苦難史観」と呼ぶ者もいるくらいである。

現代の南北朝鮮において最も評価される輝かしい歴史遺産の一つ、ハングル文字の創設という歴史的瞬間も咸錫憲にかかれれば、偉大なハングル文字の創設ではなく、文字成立前の無文字社会にスポットが当たる哀れな民衆が強調され、苦難の歴史へと読み替えられる。

正音⁽¹²⁾の制作は民族の自覚運動の芽生えである。民衆が目を得たのだ。五千年の歴史を持つ民衆が、今から五百年前にやっと目を開き、自己解放の道具を得たということは、なんと不思議なことか。どれほど残酷で恥ずかしいことか。ではそれまでは盲の歴史ではなかったのか。だから苦難の歴史だというのだ。⁽¹³⁾

ではハナニムはなぜ「苦難」を与えるのだろうか。

苦難の荷を背負うのは我々が間違っているからなのか。ハナニムがそうさせたのかと聞く人がいるかもわからない。私は今まで、あるいはハナニムの意思だと言い、あるいは我々の過ちだと言った。矛盾しているといえば矛盾している。だが私はそれ以上に言えない。事実がそうであるからどうしようもない。ハナニムがそのように予定したと言えれば迷信だ。反対にみんなわれわれの過ちだというと独断である。非科学的だ。ハナニムもなく我々の罪もないと言え、それはこじつけだ。⁽¹⁴⁾

これらの引用を見る限り、「苦難」の原因に対する答えは用意されていない。20代の青年の思索が綴られた、エッセイならではの記述である。しかし本著を精読すれば、民族が苦難を背負う原因について、「歪んだ『民族的特性』の矯正」あるいは「不義への制裁」といえる。

まずは、「不義への制裁」としての「苦難」の例を見てみる。次は、世祖の時代の死六臣に対する記述である。

ハナニムは六臣を正義の祭壇の供物にしたのである。この民族のために供物として要求したのである。それゆえ彼らは死ななければならなかった。死んでまず、韓国のために不義の負債を返さなければならなかったのであり、つぎに、義人の種を生かさなくてはならなかった。(中略) 生とはすなわち、今までのあらゆる時代と個人が負う負債を全的に引き受けるという約束の下に受けた賜物である。それゆえ人は必ずその代価を償わなければいけない。もしも償わない場合には、債権主であるハナニムは容赦なくわたしから最も貴重な者を奪っていく。六臣は世祖とその徒党が犯した罪の代価であった。世祖が犯した罪悪の代価をなぜ罪のない六臣が償うのかと、不平も言いたくなるが、歴史の責任者である韓国の立場に立つとき、その不平はあり得ない。罪を犯したのは首陽⁽¹⁵⁾ではなく、韓国の魂であった。⁽¹⁶⁾

咸錫憲は韓国史の主体を、個人や階級ではなく民族という単位においていた。罪を個人に還元せず民族の負債・過失と捉え、それに対して連帯責任として罪のない民族という単位に災いを及ぼすのである。ハナニムの支配したもう歴史への不義とは、神によって自由意志を与えられたにも関わらず、人間の認識不足や不徳によって果たせなかった人間の過ちとも解釈できる。

民族の連帯的な責任という捉え方は、「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」執筆当時の1930年代に流行していた国学民族運動や申采浩などの「民族史観」を積極的に取り込んだ結果であろう⁽¹⁷⁾。同時に、民族が特定の罪を背負い罪悪の代価を払うという考え方は、統一神学(統一教の教義)にも見られる⁽¹⁸⁾。

歴史上起こった、下剋上のような「道徳的不義」(儒教道徳への不義)に対しても、その罪を個人に還元せず「民族の罪」とし、それに対して神が烈火のごとく怒り、不義に対する代価を支払わせ、試練を与えたと説明している。

このような神による「不義への制裁」といえば、旧約聖書に頻繁に登場するモチーフである。このことから、咸錫憲のいう「聖書的立場」とは、イエスの生涯やその行いを綴った「新約聖書」の立場というより、苦難の歴史であったイスラエル民族史を記した「旧約聖書」の立場をイメージしているようである。

30年代当時の植民地において、一部の朝鮮人クリスチャンの中には、放浪、奴隷、捕囚の民となる弱きイスラエル民族に、当時の朝鮮民族の置かれている状況を投影させる傾向が見られた。エジプト、ローマ、バビロンは「日本」を指し、パロやネブカドネザルは「天皇」、十字架のイエスは「受難の愛国者」であり、モーゼは朝鮮民衆を解放する待望の「メシア的指導者」と考えられていたのである⁽¹⁹⁾。植民地末期に、当局が旧約聖書の購読を禁止した⁽²⁰⁾ことから、イスラエル民族の暗喩を自民族と深く関連付けて理解していたものと

推察される。

2-2. 「歪んだ『民族的特性』の矯正」と「民族改造論」

次に「歪んだ『民族的特性』の矯正」としての「苦難」について見ていく。

韓民族の本性である「仁・勇・智」を本当に正しく育てて、その美を開示しようとするなら、必ずこの大きな過ち（ネガティブな民族的特性）を直さないことにはだめだ。何よりもまず己の宗教を持つべきだ。我々が苦難の荷を背負うようになったのは、我が国の歴史が途中で変更されるようになったのは、ハナムがこの病を治そうとしてとった方法だと私は思う。(21) (強調及び()は引用者)

まことの教育をしようとする親の愛の立場において考えてみるがよい。我々がもし放蕩息子を持つ親であり、しかもその息子を憎まず、どのようにしてでも一個の人間にしてみようという考えをもつなら、反逆を重ねる不幸息子のためにどういう方法をとるだろうか？(中略)人はひとえに苦難の絶頂においてのみ自分の姿に立ち返るものだからである。そう言うわけで壬申倭乱と丙子胡乱は起こった。(22)

苦難を受けるべきだ。我々が犯した罪に因って苦難を受けるべきだ。災難が来ればまず避けることのみを考え、悲嘆に暮れるだけが、その党派心を捨てない限り、猜疑心を捨てない限り、義人を大切にもらすことを知らない限り、患難は決して去らないだろう。ハナムの永遠の法則によってそうであろう。(中略)我々の平面的な人生観を直すため苦難を受けねばならない。自我に忠実であるために、姑息主義を破るために、隠遁主義から脱するために、より厳しい苦難といえども受けねばならない。(23)

我々の本性をあらわすために、苦難を受けねばならない。優しさが懦弱に陥らないようにするため、失った勇気を再びとりもどすために、要領だけに墮落した知恵を生かすために、途中でできあがった奴隷の習性をなくすために、力強い意志が自我になり、高潔な魂を鍛え上げるために火のような苦難が必要だ。(24)

咸錫憲は朝鮮民族が本性を開示して善なる方向に向かうためには大きな過ちを直す必要があり、その過ちを神が直そうとするがゆえに歴史的に苦難を与えたと解釈している。神の厳しい苦難によって党派心、猜疑心、姑息主義、隠遁主義といった朝鮮民族の負の民族性が矯正されると考えている。

「歪んだ『民族的特性』の矯正」のための「苦難」を考える際に、咸錫憲は「満州」の存在を重要視している。ここで咸の「満州観」を確認しておきたい。

咸は、古代三国時代に高句麗が滅亡することによって中国大陸の領土(「旧満州」)を失い、領土が半島内に押し込められた辺りから、この民族は民族性や自主性を失い、その後は弱々しく歪んだ「民族的特性」を持つようになったと説明している(25)。「旧満州」の領土を失った「高句麗の死」は、朝鮮 5000 年の歴史の中で最も胸の痛む事件であり(26)、「満州」の領土を失って以降の韓国史は特に「苦難」に陥るようになったと説明している。

咸錫憲は領土と共に精神を失ったとし、「失った精神」を回復し自主性をもった民族にな

るために、「多くの苦難」が必要になったと解釈した。壬申倭乱（文禄慶長の役）や日本の植民地、漢四郡や蒙古の支配などは「神の摂理」(27)で、歪んだ民族的特性を矯正し、民族を成長させようとする「ハナニムの御業」だと説明している。

満州を重要な地と考え、朝鮮半島と満州を一体であると考えた歴史観は、日本の植民地主義的な満鮮史観にも通じる。植民地当時の著名な歴史家である申采浩も、同様の主張をしている。申采浩は高句麗を国魂と考え、高句麗こそが独立自主発展の精神を象徴すると認識していた。

咸錫憲の用いた「苦難」という言葉をもう少し掘り下げてみたい。

一般的に、キリスト教神学に登場する「苦難」といえば、イエスの十字架のことを指す。

一方、イスラエル民族における「苦難」とは、一神教的な神の命令や戒めを守らなかったという罪概念に根付いたものである。イスラエル民族の神は、放浪、多民族の支配（奴隷、捕囚）という民族的苦難の中で、遊牧的な神から全宇宙を創造し支配する唯一神へと変わっていく。罪概念は、民族的苦難の状況の中においても全能なる神が助けてくれない、隠れてしまった所以の解答(28)、つまり「自らの信仰の足りなさが故に神が助けられない」という自己断罪の意識から発生する。

旧約聖書のイスラエル民族の苦難とは、全知全能な神でありながら神が隠れてしまう（神の不回答、非救済）のは、イスラエル民族の神への不信や、神と交わした律法に違反するという神との契約不履行に起因する。

こういった罪概念を持つイスラエル民族の「苦難」と、咸錫憲が解釈した韓国民族の「苦難」とを比較してみよう。一神教の伝統のない朝鮮民族には、神との契約不履行によって生じる罪概念はそもそも存在しない。代わりに、咸錫憲の「韓国民族の苦難」の原因は「歪んだ民族的特性」である「宿命論的態度」だと説明されている。さらに本著の結論でも、「宿命論的態度」を変えていくべきだと強く主張している。イスラエル民族は「苦難」の原因が「罪」であるとして「苦難」を受け入れる。一方、朝鮮民族は「苦難」の原因が「歪んだ民族的特性」であることから、「苦難」に勝って「歪んだ民族的特性」つまり「宿命論的態度」を改めることが求められている。

「歪んだ民族的特性」という言葉で語られた、咸錫憲の民族観を見ていく。

咸錫憲が自民族に対してみるのは、容赦のない批判である。次の引用では、これでもかと自民族を蔑み、鋭い批判が繰り返されている。

我が国の歴史では、その自我を失ったということ、自分を求めようとしなかったことが、百の病、百の弊害の根本原因である。自分を失っているために理想がなく、自由がない。民族的な大理想が無いために大同団結が出来ない。（中略）また自由がないために党派を作るようになる。党争の目的は小さな勢力を競うことになるので、強い者に対して卑屈になる者ほど激しい。だから、党争は奴隷根性から生じたものである。(29)（強調引用者）

迷信はどの社会にもある。けれど我が国ほど甚だしいところはない。なぜかというと民衆の精神が萎縮してしまい陰性になったからである。開けっぴろげに堂々と学問を信じていることが出来ず、圧迫者の下でどう生き延びるか、それだけを考えるから革命する力が無く、世の中がいつになったら変わるのかと思うだけは、発達するのは迷信しかない。おまけに政治は正当な宗教を与えず、しきりに迷信を奨励して利用してきた。民衆は精神的バック

ボーンをすっかり失ってしまった。(30) (強調引用者)

韓国人は深刻性がない。掘り下げることが出来ない。考える力が弱いということだ。深い思索がない。現象の背後にある実在を捉えようとせず、無情の下で永遠を求めようとしない。雑多の中で一つの意味を得ようと掘り下げる、真の暗闇の混沌の中で卵を抱いて座るめんどりのように、じっと見つめる、運動する、考える、brooding overする精神が足りない。したがって、詩のない民族であり、哲学のない国民であり、宗教のない民衆である、これが大きな過ちである。このために歴史劇の脚本が途中で変わったのであり、このため結局大きくなれなかった。(31)

引用を見ていくと、「歪んだ民族性」の具体的イメージを捉えることができる。自我の喪失による「奴隷根性」が根本的な「歪み」のようである。自我の喪失により民族の「理想」や「自由」がないため、「大同団結」できず、強い者に卑屈な「党争」が生まれるとする。「奴隷根性」は「精神の萎縮」とも言い換えられ、このことにより、「深い精神性」が欠如しているので、健全な宗教が育たず「迷信」に溺れているという。

咸錫憲は、「他律性」「消極性」「党派性」「地理的要因」(32)などの言葉で、民族的特性を説明している。これらは、植民地期の日本が、支配の論理を笠に着て語っていた朝鮮の民族観である。南富鎮は近代日本からみた朝鮮の民族性の起源を悪政と風土の2つによると整理をしている(33)。悪政というのは主に朝鮮時代の党争に関する言説が多い。例えば、青柳南冥の著作である『朝鮮文化史大典』(朝鮮研究会蔵版、1924)は、朝鮮の歴史は必然的に深刻な党争によって分裂をしていたと描いている。朝鮮王朝の滅亡と結びつけた儒学における朋党の歴史の否定は、当時よく見られた主張であった。

「風土」的特徴とは民族性を風土と結びつけて語る言説のことであり、矢津昌永は「朝鮮の植民地的資格」『太陽』(1904年3月)において朝鮮半島は「四囲の優勢なる各種族の競争植民地」であるため、そこに住む住民は自ずと「殖民的」「移民的」な性質を持ち、その結果国家による「独立」も困難であると、白田二荒は「朝鮮統治の根本義」『満鮮之実業』(1911年4月～10月号)で朝鮮の中途半端な気候が朝鮮人のすべての悪徳の要因と説いた。上記のような民族性論は歴史学の分野に留まらず人種学や人類学という学問体系の中で取り込まれて定着していく(34)。

これらの日本人が発表した朝鮮史や文化史は、被統治層にも朝鮮民族の自己反省や自己改造を促す思想背景として影響を及ぼした。代表的なのが、李光珠(1892-?)によって書かれた「民族改造論」(1922)である。李光珠は二度の日本留学をした植民地期きっての知識人であり、朝鮮近代文学の父とも言われている人物である。李光珠は「民族改造論」の中で、朝鮮民族の衰退原因について、「利己、虚偽、沈淪」など、朝鮮民族の「劣等性」を指摘し、朝鮮人の覚醒、自覚による精神的な改造を説いた(35)。李光珠の「民族を改造する」という言説には批判も集まり物議をかもしたものの、「民族改造論」は当時、一世を風靡した。李光珠以降、朝鮮の多くの新聞や雑誌で民族改造論が発表されていった(36)。

李光珠より9歳年下の咸錫憲の「歪んだ民族的特性の矯正」の言説は、同時代を生きた李光珠の「民族改造論」と、当然ながら気脈が通じている。

2-3. 苦難の結果としての「民族的特性」

苦難に押しつぶされた韓国は生命が衰弱してしまった。魂は躍動する力を失い、心は静寂を奪われ、気がくじけ、勇気を無くした。すなわち、退廃的になり、消極的になり、固陋に陥り、卑俗に陥った。高麗時代以来、宗教・文学・美術・風俗を問わず、一切が一貫して萎びていくだけで、三国時代に見られるような生命力に満ちた雄壮で優雅な思想や作品を見ることが出来なくなった。苦難の悲痛な文字は彼らの骨格にも、顔の様子にも、声にも、そして心臓の上にも、刀で刻んだ様に深く刻まれた。(37) (強調引用者)

韓国の芸術は悲哀の芸術だとよく言われている。それは嘘ではない。三国時代以前はそうではなかったが、少なくとも高麗以降はそうだ。芸術は自己実現、生活の反映である。その生活が受難であり、その心が痛むのに、その歌う歌、描く画が悲しみでなく痛みでないものがあるか。また文化の遺産として残っている芸術品の分量でも韓国は貧しい。あるものといえば大概古代のものであり、現代に近づくにつれて貧弱になってくるが、どんな事実でも歴史の証でないものがない。(38) (強調引用者)

韓国では、特に統一新羅滅亡後に建国した高麗王朝以降、宗教、文学、美術などに「悲哀」が見られるという。「これらのすべての習性は苦難の暴君が我々に背負させた荷物」(39)であるとし、苦難の歴史によって、後天的に生まれたものであるとしている。

民族性に「悲哀」を見るのは、朝鮮民族の芸術性を「悲哀」と語った柳宗悦の主張が代表的である。このような「弱々しい朝鮮民族・文化像」は、柳をはじめ植民地時代の日本人によって広く主張されていた。

「民族改造」の必要性を声高に叫ぶ一方で、咸錫憲は朝鮮人の「民族的特性」について、別の特徴も指摘している。前述したネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面を見いだしているのである。

咸錫憲は、前述した李光珠の『民族改造論』を引き合いに出し、我が国の人は根本が優しい人間で、慈悲深く、善良な「仁」の特性をもち(40)、優しい民がゆえに平和民族であり道徳性が高く(41)、「勇」も兼ね備えているという(42)。しかし、現在はこれらポジティブな「優しさや勇ましさ」は皆目見られなくなってしまっているという。また「温順で情け深い性質は気候の影響が大きく、穏やかな性質の所に、特徴の無いピリッとした味のない場所に居住するため、生ぬるい性格になった(43)と現在においては長所が短所となっていると主張する。植民地時代に、咸錫憲同様、朝鮮の民族性を「楽天的」「善」などポジティブに捉えて主張をする人物は何人もいた(44)。

つまり咸錫憲のいう朝鮮の民族的特性は、本来ポジティブなものであったが、気候の影響や満州を失うなど歴史の過程で歪められ、「歪んだ民族的特性」を矯正するための「苦難の歴史」によって、ますます歪められたと考えていることになる。

実はこのポジティブな側面の「民族的特性」は本著において極めて重要である。ポジティブな側面は「世界からすれば語る余地もない」(45)韓国人に世界的な使命があり、韓国人しか出来ない任務を付与し勇気づける希望を与えることになるからである。

3. 「苦難の女王」としての世界的な使命：「苦難」の積極的意味

3-1. 「宿命論的態度」から「摂理論的態度」への転換

「聖書」の示す真理によれば、「苦難こそが韓国がかぶるいばらの王冠である」（強調は引用者）⁽⁴⁶⁾と表現している。「いばらの王冠」はイエスの象徴であるから、「イエスの受難」と民族の「苦難」を重ね合わせようとしたようだ。

次の引用は、咸錫憲が「苦難」の必要性を訴えている箇所である。

我々の生命を麻痺させる宿命哲学を追い出すために最後の抵抗を刺激する苦痛が必要だ。来たるべき新しい歴史において、我々の使命を果たし得る資格者となるために、苦難は絶対に必要だ。より高い道德、より幅の広い進歩的思想の先駆者となるために、われわれが持つすべての古いものを容赦なく奪っていく苦難の狭き門が必要だ。⁽⁴⁷⁾（強調は引用者）

我々は苦難のない生を想像できない。死は生の一つの果てであり、病は体の一部分である。十字架の道が生命の道である。/苦難は罪を清める。苦難は人生を洗い清める。不義によって傷つき汚れてしまった靈魂は、苦難の苦汁で洗ってはじめて回復される。/（中略）苦難は人生を偉大にする。苦難に耐え得ることによって生命は一段と深化する。抑圧されることによって敵を抱擁する寛大が生まれ、窮乏と刑罰をこらえることによって自由と高貴を得ることが出来る。⁽⁴⁸⁾

咸錫憲は、歴史に見られる「苦難」に、より積極的な意味を持たせようとしている。

咸錫憲は「宿命論と摂理論は遠くなく、互いに似ており、違いは統一的、道徳的な意味をもっているかどうか」⁽⁴⁹⁾だと述べている。つまり、歪んだ民族的特性である「宿命論的態度」は、裏を返せば苦難の摂理の甘受となり、両者を分かつのは「道徳的な意味」を自覚しているかどうかだという。ここでは苦難の摂理の甘受を「摂理論的態度」と名付けることにしよう。

「苦難」に「宿命論的態度」で接するのではなく「摂理論的態度」で接することができれば、未来の世界に大きく貢献できるのだという⁽⁵⁰⁾。

3-2. 「世界の不義」を背負う者による大転換：イザヤ書の「苦難の僕」

世界の不義の結果を我々が負わされているゆえ、それを洗い清める人は我々の他にいない。だから、我々の使命だというのだ。使命は我々でなければ果たせないのだ。（中略）負債の精算は我々だけ出来る。過去においても新しい歴史の芽はつねにゴミだけから生えたが、将来の歴史ではことにそうだ。それゆえ韓国、印度、ユダヤ、黒人、これらが抑圧の不義の苦難から勝利を得て本来の役割を果たすようになれば人類は救われるであろうし、でなければこの世界は運命が決まったも同然である。人生は物質の奴隷ではないことが、われわれによって証明されなければならない。愛でサタンに勝ち、苦難故に人類を救えることが嘘でないことを我々は証明しなければいけない。罪は赦すことによってのみ消えるということを我々は世界に明らかにしなければならない。すべての人類の運命が我々にかかっているというのはこのためである。⁽⁵¹⁾（強調引用者）

朝鮮民族が「世界の不義を一身に背負っている」⁽⁵²⁾という記述に注目したい。韓国のほかに「印度、ユダヤ、黒人」も「世界の不義を背負う者」として挙げられている。これら「世界の不義を背負う者」は、世界的使命を果たす⁽⁵³⁾という。世界を救うのは、これら「世界の不義を背負う者」だからこそ可能な「愛」や「赦し」だからだという。「苦難」があるのは「世界の不義を一身に背負った」からで、だからこそ「世界を救える」というロジックの完成である。

また、彼らに救われることで世界がどう変わるかについて、詳細は下記の通りに記されている。

信仰は世界をひっくり返す。ふつう、理性で知る世界は現象の世界だ。それは真ではない。真の世界は現象の背後の真の信仰へ開かせる。それゆえ世界が変わる。信仰の立場でみる時、世の中の大きいというものが小さく、強いというものが弱く、世の中の正しく貴いというものが間違って賤しいものになる。それは真が現れるからである。つまり正しくいえば、信仰が世界をひっくり返すのではなく、世の中がひっくり返しておいたのを信仰が元に直すのである。(中略)いま、人類歴史にそれが起ころうとしている。いや、「時が来る、今がその時だ」、すでに起こっている。韓国が世界の韓国になり、アフリカ黒人が世界列強を鼻であしらうことは何を意味するか。今まで弱肉強食を根本原理としてきた文明が、次第にその目標が虚像であることを知り始めた。これから先、歴史の方向は 180 度変わるだろう。⁽⁵⁴⁾ (強調引用者)

引用から、「救われた世界」とは、現状から「ひっくり返された世界」であることが分かる。ひっくり返すとは、「強い者が弱く」、「貴い者が卑しく」なることであり、それが世界の本来の姿だったという。

ここで意味する「強者」や「正しく貴い者」とは、弱肉強食の世界を作り上げ、世界を我が物顔で牛耳り、弱小国を踏みこむ「列強の帝国主義」を意味するのであろう。このような「列強の帝国主義」を否定する記述がある章「苦難の意味」と「歴史が示す我らの使命」は、植民地時代には検閲を受けて削除され、目次のみの記載となっている。

「苦難」の民族こそが世界を救う民族であるというロジック、世界史においてとるに足りない弱小国が逆転し、大国に勝ることを示すロジックは、聖書のイザヤ書、第二イザヤによって記された「苦難の僕」の物語を彷彿させる。このことは、神学研究者李正培も指摘している⁽⁵⁵⁾。

第二イザヤとは、バビロン捕囚時代に活躍した預言者である。「苦難の僕」の物語は、旧約聖書の中で最も有名な章句の一つである。キリスト教においては、イエス・キリストの生涯を予言する重要な聖句と認識されていることは説明するまでもないだろう。

「苦難の僕」の物語は、次のように始まる。

「見よ、わがしもべは栄える。彼は高められ、あげられ、非常に高くなる。」⁽⁵⁶⁾

「苦難の僕」の概要はこうだ。人々に軽蔑され、病を持ち忌み嫌われていた僕がいた。僕は、人々の咎や不義のために苦しめられていたが、人々は、そのことに気づかなかつた。僕を苦しめることは神のみ旨であり、黙って苦しみを受け、咎の供え物となったことから、神

は僕を高められたという物語である。

荒井章三によれば、「僕には受動的ではない、むしろ能動的な姿を見てとることができ、『苦難』という受動を通じて『贖い』という能動をあらわすという神の性格がここに現れている」⁽⁶⁷⁾という。つまり、哀れで力のない僕は、自らのものではない咎を積極的に引き受ける、苦難を担うという代理的犠牲、つまり「代贖」を行っている。僕は、自らは潔白であるにも関わらず、他者の罪と罰、死という「苦難」を神の憐みと義の心によって受け入れることで、「栄光」の立場へと持ち上げられる。「苦難・屈辱」から「栄光・高挙」への対比が際立っている。

世界を創造する唯一神は、世界の創造のみをするのではなく、捕囚の身であるイスラエルを救済へと導く、購う神でもある。新井はこれを「栄光」から「苦難」へと下がり、そのことを通じて神の栄光をあらわにするこの僕は、個人であれ、集団であれ、歴史の彼方に待望されるメシアとして位置付けられている⁽⁶⁸⁾と説く。この苦難の僕が誰なのかについては、様々な解釈がされてきた。前述した通りキリスト教神学において、「苦難の十字架を通じて人類の贖罪を行うイエスキリストである」という解釈はあまりにも有名な話であるが、預言者を書いた第二イザヤ自身、エレミヤ、エリアではないかという説もある。また同時代に生きた苦難を背負う捕囚のイスラエル民族であるとも考えられてきた。「苦難の僕」が、選民であるイスラエル民族であれば、世界におけるイスラエル民族の意味と運命の描写と言えるであろう。

咸錫憲は苦難の歴史を持つ、とるに足りない朝鮮民族に世界史的な役割があるというのは、まさにこの「苦難の僕」の論理である。世界史を形成するには常に苦難を背負う者が必要であるが、どの民族も世界史の華麗な舞台に出ようと、その任につこうとしない。世界には下水が必要であるが、その役割を我々が担おうという「受難の女王」⁽⁶⁹⁾思想である。

イザヤの苦難思想を根拠に、苦難をうける僕を取るに足りない朝鮮民族の歴史に適用させ、朝鮮民族は僕のように世界的な不義や苦難を一身に自ら引き受ける犠牲精神を持ち、救済のための世界的な代贖を担うという役割を持っていると説く。そして韓国民族の苦難の主人公になったのは世界史による神の摂理であったという使命感を見出した。

この世界を朝鮮民族が変えていくという自民族中心主義は、前述した 67 年に刊行された統一教の教典書『原理講論』⁽⁶⁰⁾でも見られる。『原理講論』において、朝鮮民族は神に選ばれた選民だとされている。選民は、人間を墮落により失い、打ちひしがれている神の心を自分のことのように感じられる「神の心情の対象となる国」⁽⁶¹⁾でなければならないという。「悲しみの神の心」に寄り添えるのは、外勢に侵略されるなど、「悲惨な歴史路程」を歩んだ民族だけだと説明される。

咸錫憲の焦点は「苦難」にある。「苦難」の原因が「歪んだ民族的特性（の矯正）」であり、「世界の不義（の代贖）」であった。一方、『原理講論』の焦点は選民にあり、選民の条件が「苦難」だと説明されている。『原理講論』の場合は、咸の「歪んだ民族的特性（の矯正）」という苦難の原因は見いださず、「世界の不義」を原因とする「苦難」のみを強調している。

3-3. 「トゥッ（ㄱ）」の意味と後天開闢思想

表題に登場する「トゥッ（ㄱ）」とは、「意志」「意味」あるいは「こころ」という意味である。歴史の底を一貫して流れる意志のようなものと解釈できる。咸には一神教的なバックボーンがあるため、神の聖旨とも捉えられよう。現に、唯一神ハナムの摂理史的なキリス

ト教神学の視点は根強く残っている。

一方で、咸錫憲は改題の理由として「キリスト教の枠を超えて自分だけの宗教を探し求めようと、自身の考えを反映したため」⁽⁶²⁾と述べている。

1930年に執筆された『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』から30年以上経って出版されたのが本著であり、その間著者の宗教観は多くの宗教の影響やガンディー思想の影響などを受けたことで知られている。

また、「意志(トゥッ)」という言葉を表題に用いたことにより、要旨は大きく変わっていないものの、キリスト教徒だけの読本を超えて、一般大衆が読み継ぐ韓国社会の古典となりえたともいえるだろう。

「新しい宗教」を渴望し、汎宗教的な立場を模索する中で、伝統宗教である儒教や仏教について墮落した宗教だと批判した一方⁽⁶³⁾、本著の主張には、実は韓国の宗教思想も埋め込まれている。

朝鮮半島には、近代史の中で成立した民族思想である東学が、後天開闢思想という終末思想を唱えている。後天開闢思想は、その後に発生する朝鮮半島の宗教に大きな影響を与える。東学では世界を先天と後天に分け、後天開闢は先天の世界の運命が尽きた際に新しく後天の世界が開かれると説く。新しい世界は既存の社会秩序が崩壊し不条理や負秩序が正されるという。乱れた西洋勢力の侵略が止まり、先天世界で抑圧された者が良き待遇を受け、真の自由と平等がもたらされ、地上天国が到来するという主張である。

「弱肉強食の時代を根本原理とした時代」が終わり、「韓国やアフリカなど歴史の中で抑圧されてきた弱小国が世界の列強に勝る」という天地がひっくり返る現象は、朝鮮伝来の後天開闢思想の影響を受けた宗教ナショナリズムの一端を見ているようでもある。

後天開闢思想を取り込んでいるのは、『原理講論』も同様である。冷戦構造の文脈を背負った『原理講論』は、「新しい歴史・世界」では共産主義という物質主義に、宗教思想を背景とする精神主義が勝つといった記述をしている。

4. まとめ

日本からの独立後、48年に国号が制定された韓国では、朝鮮戦争を経た60年代に入った頃から、民族主義が高揚し始めた。「韓国的なもの」探しの中核を担ったのは文学界で、エッセイの形で推進されていった。そこで広く読者が存在し、注目されたのが、李御寧と並び、咸のエッセイであった。

『意志から見た韓国の歴史』(1962)は、キリスト教的な唯一神の介在、もしくは神の摂理を韓国通史から発見しようとした、キリスト教の摂理史観に基づいた歴史エッセイである。

本著は次の二点に要約できる。

一点目は、「苦難」というキーワードから朝鮮半島史を概観した点である。ナショナリズムのルーツとなる歴史の核心に「苦難」を見いだしている。咸錫憲は「苦難」というキーワードを用いて、古代から現代までの通史を中心に民族の文化や社会について緻密かつ詳細な記述を試み、「苦難」を浮き彫りにした。朝鮮民族は、古来から「苦難」の歴史を共有していることを、くどい程に記述している。

日本の植民地統治時代の植民地教育を受けた世代は、「宿命論」的なネガティブな民族性という植民地主義的言説を担わされた。植民地時代には、朝鮮人自らも、民族性について「虚偽」「非社会的利己心」などネガティブに語ることが一般的であった。後に歴史教師となる咸錫憲は、植民地教育として植え付けられた栄光の日本史と敗北の朝鮮半島史との差を、より強く実感していたことだろう。

このように、「朝鮮民族」が共通して持つ精神性に大きく影響を及ぼした「苦難・苦悶の歴史」について、緻密に切り込んだのが咸錫憲の業績である。歴史という民族アイデンティティを創成、認識させるものに「恨的な苦難・苦悶」のイメージを大衆に鮮明にたたき込んだことは、恨が民族性として認識されていく上において極めて大きな一歩となった。「苦難の歴史」という共通認識こそが、韓国社会において「恨の民族」言説が広く普及する要因となったからである。

二点目は、「苦難」を価値あるものとして肯定的に位置づけた点である。苦難の歴史を挙げ連なった上で、苦難は「宿命論」の象徴ではなく、「宿命論」を脱して民族改造を行う礎とみていた。

咸錫憲は「苦難」という言葉をキリスト教的な文脈から捉えて使用したのは、彼が強烈なキリスト教のバックボーンがあったからだ。少年期にキリスト教系の学校で学び、日本留学時代に無教会派と交流しており、帰国後も母校で教鞭を執っている。本著を連載したのもキリスト教系雑誌においてであり、当初のタイトルは「聖書的立場から見た朝鮮の歴史」であった。キリスト教神学における「苦難」とは、一般的には「イエスの十字架」のことを指し、併せて「イスラエル民族の苦難の歴史」が取り上げられることもある。咸錫憲のエッセイでは「イエス」が登場する新約聖書の存在感は薄く、「聖書的立場」とは旧約聖書で語られる「イスラエル民族の苦難の歴史」から来ていると思われる。

したがって、咸錫憲が本著で行ったことは、唯一神（生きた神）が「韓国史」に常に介入しているという、キリスト教の文脈の中へ「韓国史」を落とし込む作業であったともいえる。無教会主義者である藤井武の影響を受けて、韓国の民族史とキリスト教とを結びつけて理解した咸錫憲は、ユダヤ人にとっての旧約聖書のように、韓国の歴史的な出来事に神が介入してきた事例を探しだそうとした。朝鮮民族に働きかける神の苦難の御業は、依存性や奴隷根性を持つ「民族的気質を矯正する恩寵」であり、同時に「民族的不義に対する制裁」であった。歴史の中で韓国人に与えられたすべての歴史的な苦難は、世界的使命のための試験であり、鍛錬の過程であったと説いた。

キリスト教の文脈というのは、具体的にはイスラエル民族の歴史である「旧約聖書」のイザヤ書の第二イザヤの「苦難の僕」のことである。「苦難の歴史」という終末論的歴史観⁶³⁾は、最も下にある者が最も栄光の地位にあるという発想の逆転をもたらした。このことは、貧困にあえぎ、世界的な位置づけにおいても取るに足りなかった朝鮮民族に、大きな希望を与えたことは言うまでもない。だからこそ、本著は60年代の韓国社会にインパクトがあったのである。

註

- (1) 咸錫憲自身も序文で「これは私の独り言でありため息であり、回顧であり、分かってくれる友人に向けての慰みであり、勧め励ましである。われらの祈りであり信仰であり、歴史研究ではない」と明言している。
- (2) 内村鑑三に影響を受けた人物たちが発行していた信仰同人誌。
- (3) 『聖書朝鮮』65号(1934年6月, 聖書朝鮮社), p.129. (朝鮮語)
- (4) 朴賢淑「咸錫憲における「シアル思想」の萌芽(2)」『神学研究』第52号(関西学院大学神学研究科), p.212.
- (5) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.46.
- (6) カルバン主義をはじめとする長老派などのキリスト教では「偉大な神」により人間は自由意志を与えられ、判断が出来るようになったが、人間の認識不足によって、神が元々定めた計画や予定を、人間が放棄していると考ええる。
- (7) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.70
- (8) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.361.
- (9) これら3つは演劇で例えると、それぞれ「舞台」「俳優」「脚本」に匹敵するという。
- (10) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.70.
- (11) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.69.
- (12) ハングル文字のこと
- (13) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.193.
- (14) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.373.
- (15) 世祖のこと
- (16) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), pp.208-210.
- (17) 朴スンゴル「咸錫憲の歴史叙述と歴史認識」『韓国史学史学報』22号,(韓国史学会, 2010), p.36.
- (18) 統一教の神は全能性を有しながらもその力を抑制し、被造物である人間を創造した。人間には自由意志と責任分担を与え、ともに世界創造の「同参者」として神と人間の相互的な関係を重要視するという「内在性の強い神」である。しかし人間は神の意に反して墮落をし、神の創造理想がかなえられなくなった。実子である人間を失った神は人類歴史を絶えず、人間を済しようと摂理した。墮落した人間が神の子として戻ってくることを「救援摂理史」としている。神の救援摂理の目的は現在を背負うことになった「人類の開放」であるが、アダムとエバという個人的な罪が子々孫々と人類にまで及び、その罪の代価を払わせ、矯正・教育しようとする点に共通点を見出せる。
- (19) 倉塚平「朝鮮キリスト教とナショナリズム」『現代民主主義の諸問題』(御茶ノ水書房, 1982), p.144.
- (20) 李鍾聲, 「韓国キリスト教会の実態—過去・現在・未来—」『東京神学大学総合研究所紀要』(5)(東京神学大学, 2002-03), p.156.
- (21) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.100.
- (22) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.228.
- (23) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.362.
- (24) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京:新教出版社, 1980), p.363.

- (25) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), pp.81-82.
- (26) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.137.
- (27) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.361.
- (28) 加藤隆 『一神教の誕生』 (東京: 講談社現代新書, 2002) を参照
- (29) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.227.
- (30) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.287.
- (31) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.97.
- (32) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.75.
- (33) 南富鎮 『近代日本の朝鮮人像の形成』 (東京: 勉誠出版, 2002), p.76.
- (34) 南富鎮 『近代日本の朝鮮人像の形成』 (東京: 勉誠出版, 2002), p.77.
- (35) 李郁珍 「李光珠の「改造論」の意味の再考察」 『埼玉女子短期大学研究紀要』 第 35 号, p.140.
- (36) 李郁珍 「李光珠の「改造論」の意味の再考察」 『埼玉女子短期大学研究紀要』 第 35 号, p.139.
- (37) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.347.
- (38) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.50.
- (39) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.355.
- (40) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.90.
- (41) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.91.
- (42) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.92.
- (43) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.78.
- (44) 1920 年, 雑誌『開闢』の論説「朝鮮人の民族性を論じる」の中で, 李敦化は「朝鮮人の民族性は善である」と主張している。安自山は 1922 年『朝鮮文学史』の付録で, 朝鮮民族の 7 つの特徴の中に「礼節」「平和楽天」「人道正義」というポジティブな性格を挙げている。崔南善は 1928 年『朝鮮の歴史』の付録「歴史を通じてみた朝鮮人」で, 「韓国の歴史の特徴は道徳的であり, 平和を愛する。また思想の基調は楽天的である」と述べている。1925 年『開闢』の特集「朝鮮自慢特集号」では, 具滋玉や韓偉健も民族的長所について主張を展開している。
- (45) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.367.
- (46) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.71
- (47) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.363.
- (48) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.361.
- (49) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.349.
- (50) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.363.
- (51) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.377.
- (52) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.377.
- (53) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), p.371.
- (54) 咸錫憲 (金学鉉訳) 『苦難の韓国民衆史』 (東京: 新教出版社, 1980), pp.371-2.
- (55) 李正培 「咸錫憲の意志から見た韓国の歴史の中に現れた民族概念の神学的省察」 『神学と世界』 55 号 (ソウル: 監理教神学大学, 2006), p.183.
- (56) イザヤ書 52 章 13 節 『口語訳聖書』 (東京: 財団法人日本聖書協会, 2015), p.1020.

- (57) 荒井章三『ユダヤ教の誕生』(東京：講談社学術文庫), p.233.
 (58) 荒井章三『ユダヤ教の誕生』(東京：講談社学術文庫), p.234.
 (59) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京：新教出版社, 1980), p.355.
 (60) 世界基督教統一神霊協会『原理講論』第三版(東京：公言社, 2007), pp.592-3.
 (61) 世界基督教統一神霊協会『原理講論』第三版(東京：公言社, 2007), pp.591-2.
 (62) 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(東京：新教出版社, 1980), p.355.
 (63) キリスト教に関しても一部批判的なまなざしが見られる。
 (64) チョ・グァン「1930年代咸錫憲の歴史認識と韓国史理解」『韓国思想史学』21巻(韓国思想史学会, 2003), p.530.

参考文献

- 荒井章三『ユダヤ教の誕生』(講談社学術文庫, 2013)
 李鍾聲「韓国キリスト教会の実態—過去・現在・未来—」『東京神学大学総合研究所紀要』
 (5)(東京神学大学, 2002-03)
 李郁珍「李光珠の「改造論」の意味の再考察」『埼玉女子短期大学研究紀要』第35号(埼玉女子短期大学, 2017)
 李正培「咸錫憲の意志から見た韓国の歴史の中に現れた民族概念の神学的省察」『神学と世界』55号(監理教神学大学, 2006)
 加藤隆『一神教の誕生』(講談社現代新書, 2002)
 クォン・ボドゥレ『1960年代を問う』(千年の想像, 2012)
 倉塚平「朝鮮キリスト教とナショナリズム」『現代民主主義の諸問題』(御茶ノ水書房, 1982)
 『聖書朝鮮』65号(聖書朝鮮社, 1934年6月)
 世界基督教統一神霊協会『原理講論』第三版(公言社, 2007)
 『口語訳聖書』(財団法人日本聖書協会, 2015)
 チョ・グァン「1930年代咸錫憲の歴史認識と韓国史理解」『韓国思想史学』21巻(韓国思想史学会, 2003)
 中沢浩樹『苦難の僕』(新教出版社, 1964)
 南富鎮『近代日本の朝鮮人像の形成』(勉誠出版, 2002)
 朴賢淑「咸錫憲における「シアル思想」の萌芽(2)」『神学研究』第52号(関西学院大学神学研究科, 2005)
 朴スンゴル「咸錫憲の歴史叙述と歴史認識」『韓国史学史学報』22号,(韓国史学会, 2010)
 咸錫憲記念事業会編, 『民族の偉大な思想家咸錫憲先生』(ハンギル社, 2001)
 咸錫憲(金学鉉訳)『苦難の韓国民衆史』(新教出版社, 1980)
 藤井武『藤井武全集第二巻』(岩波書店, 1971)

함석헌의 “뜻으로 본 한국역사”

고난의 뜻을 중심으로

후루타 도미타테

“뜻으로 본 한국역사”는 하나님의 섭리를 한국통사 속에서 발견하려고 한 기독교섭리사관을 기초로 한 수필이다. 함석헌은 고난이라는 키워드로 한반도 역사를 개관하고, 민족의 문화와 사회를 설명하려고 시도했다. 한민족에 역사하는 하나님의 성업은 ‘민족적 기질을 교정하는 은총’이며 그와 동시에 ‘민족적 죄악에 대한 제재’였다. 또한 역사 속에서 한국인에게 주어진 모든 역사적인 고난은 세계적인 사명을 주기 위한 시험이며, 단련의 과정이라고 설명한다. ‘고난의 역사’는 가장 아래에 있는 사람들이 가장 영광스러운 지위를 차지한다는 역전적인 발상을 이끌어 낸다. 이 결론은 가난에 허덕이는 60년대 한민족에게 큰 희망을 주었다.